

## 特集：アクティブ・ラーニングと図書館—高校を中心に

### ゆるやかな協働性を教室に

金子 奨

#### 教師のしごと

教室には多様な子どもたちがいる。そして、子どもである以上、おとなの期待に沿うことなく偶然に翻弄されながら、てんでにいまある自分から脱け出そうとする。その不安定さにこそ活気が宿り<sup>1)</sup>、学びあいが生産する。もちろん、この不確定性はつねに教師の悩みの種であり、かつての班活動や管理主義、講義式一斉授業などは、それへの対処法だったといえる。しかし、同質の書籍のみが並んだ図書館が想像できないように、多様性を切り詰められた教室も存在しえない。教師のしごとの核心には、異種混交性に向きあうという困難がともなっているのである。

#### 教室のなかの異人

5年ほど前の3年生に、長田という女子生徒がいた。

教室の隅に座り、グループワークになっても机を微妙にずらしてしまう。せめて教室の中央に…と思ってくじ引きによる席替えをしても、どういうわけだかいつも端っこになってしまう。突っ伏していることも多くて、かかわりかたもぶっきらぼう。とにかくほとくクラスメイトから距離を置こうとする。潜在的な力はあるそうなのだけれども、それをまわりと分かちあおうとはしない。

彼女のために、というわけではないのだけれど

も、3学期の残り少ない授業でポスターセッションに挑戦することにした。日本史の教科書に登場する人物をひとり選び、学校図書館で調べ、それをポスター風に表現し、1対1で発表するという活動だ。毎年、理科の同僚が司書とともに取り組んでいたものだが、表現する生徒たちの表情がとても柔らかくあたたかいものだったので、ほくも真似してみることにしたのである。

2階渡り廊下に展示してある理科選択生徒のポスターから、表現方法の工夫などを学び、その後、図書館で調べる活動に入る。調べるプロセスで強調したのは、クラスメイトに伝えたいことをはっきりさせること。ある人物について、漠然と調べるのではなく、知ってほしいと思うこと、表現したいことを中心に探究するという点だった。

くだんの長田さん。司書にも事情を伝え、声かけをお願いする。しかし、図書館でもひとりで陰に隠れ、顔をあげようとしない。

「どう？ 進んでる？」

「…」

彼女が司書とともに選んだ人物は、松尾芭蕉。理由は定かではない。手元の調査用紙はいつも白紙。活動時間はあまり残されていない。

「芭蕉はいつも旅をしていたのだから、そういう生きかたをみんなに知ってもらいたいんじゃない？」

「…」

「白地図に彼の歩いた跡を落としてみるとか…」

司書が近隣の高校から集めてくれた何冊かの本を示し、ポスターのイメージを喚起してくれる。活々活動をはじめ、彩りに乏しさを残しながらもポスタ

1) 拙稿「その不安定さに活気が宿る」『教育』教育科学研究会編 No.831 2015を参照